



奇復
詭能

自來也後編記

^ 13
3329
10



へ 13
3329
10

報仇
守談

自來也 說話後編卷之四

武江 感和亭 鬼武著

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

勇呂吉郎到相摸國溫泉場併不圖入仙境条

勇侶吉郎の総國天眼坊の方ありたるが累小痔疾起り

難義よ及びぬれば天眼と商義倣く擢く湯治せんと相州

底倉の温泉ハ痔疾よ妙ありと聞ゆれば這中到らばやと

上総國を立出那地へ趣死湯治して疾を神ひけけが

侶吉ハ權く底倉逗留の中近邊を步行し鬱氣を

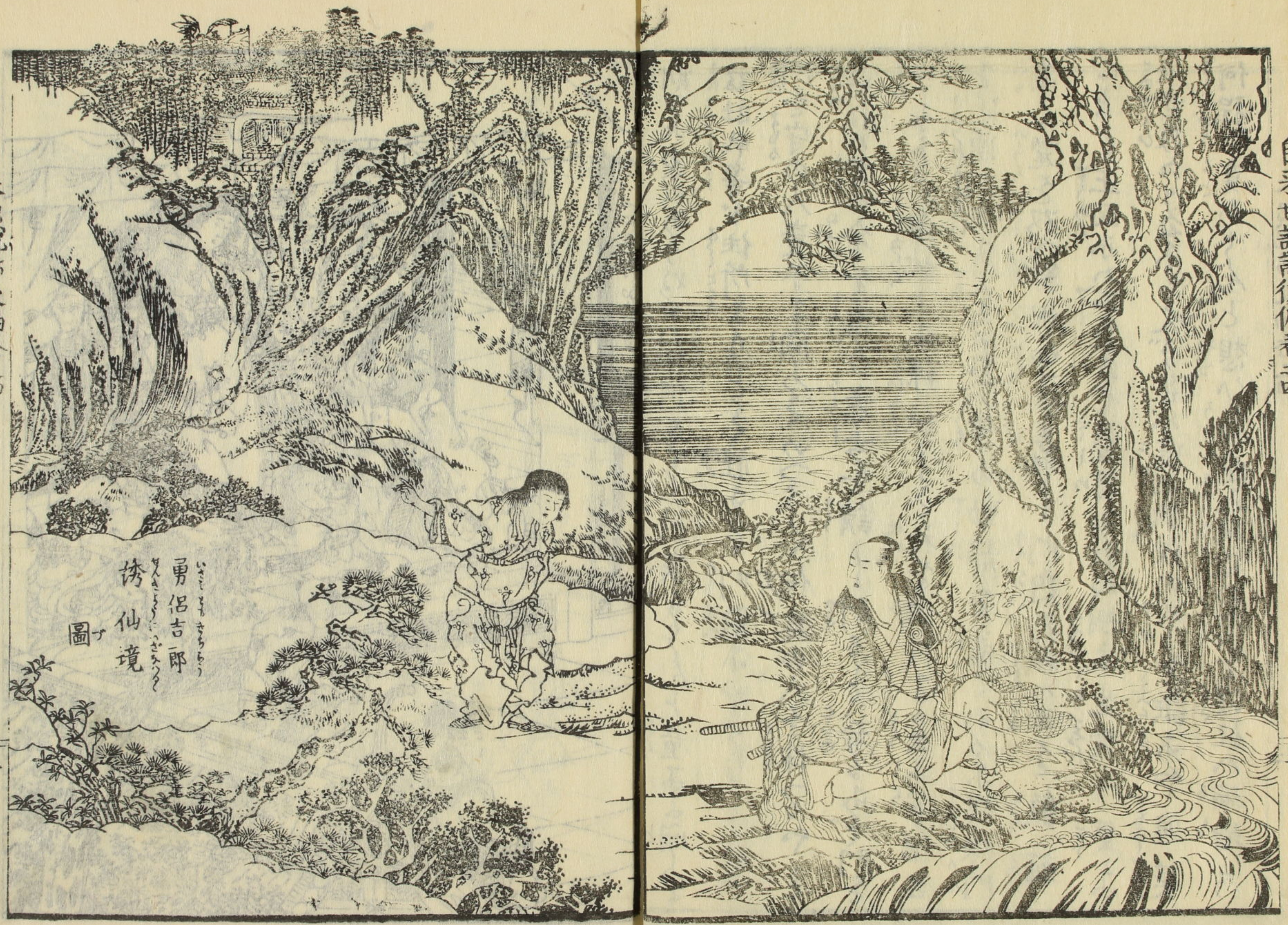
散せんと一日谷川に漁るとして山間を奥深く入處り

忍務と一個の位高死童子頭を川邊小立ち其前此所と

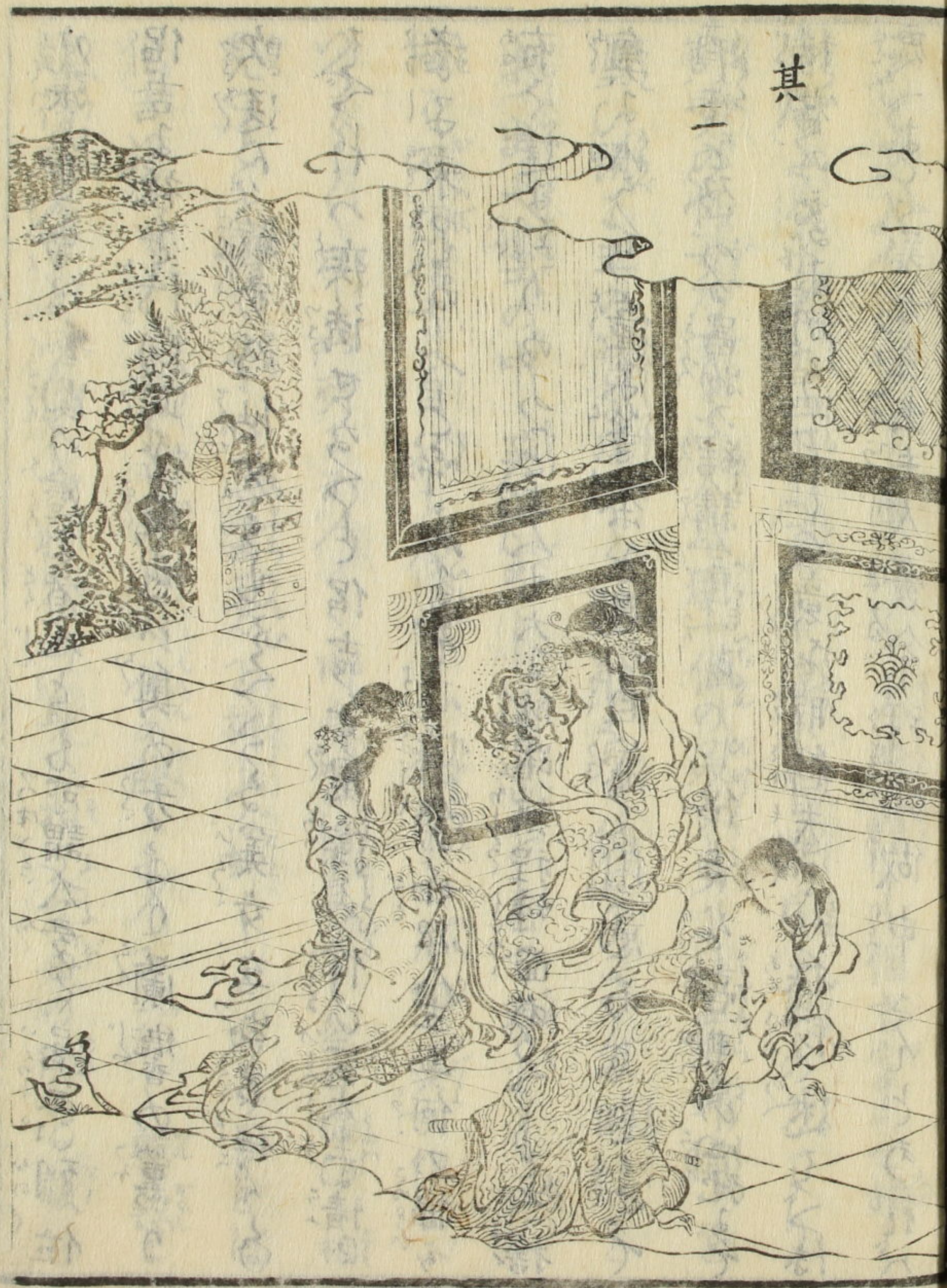
目録に兒名後編卷之四

魚の集る所ありと教へ侶吉は附巡つゝあるまじく何れりの童子と心得ありと侍處へ復一個の童子来りて刑童子よりいづく何れり客人を迎へ来也君の侍兼まの老早侍の侍れよよとて色や弓を越せしごとありたれば原の童子侶吉はいづく君權へ予行處小到り詰む予張る人脚身を這へ一獻をも勸免えらんと弓を越せしごと先刻より漁做しある坊あり免と此更遅延せりと申あぞ侶吉も富邊りの童子等と想ひたれば侍の渴水及いぬるゆへ一服をいやすんと何心なく那二個の童子小誘引山深く到る處小遙向りよ一の樓門へ侍れば這山中小斯る大家のありぬる如何ある人の家あるんと童子は向ふ茲社我等が住所ありとて程あく門前小つりこれ門を守の人童子は向ふとて何處の人を伴るやと尋れし君の命を慕ひ孝士を請へ到ると谷るあそ門を守るもの忽地上に拜伏し礼を做し立里子等侶吉を延連門内に入りぬれば中の動靜を着てある小僕棟門高く麗を双ぐ練堀四下を躰し門内乃破ハ玉を散轉ごとく正面ぬ石をりて畳目あれぬ樹木生茂り更ふ此世界のさる小とてざむは這也狐狸の弓を誑あや遮莫何程の更あると想ひお連入碼頭の階を渡れハ瑠璃乃

自來也説話後編卷之四



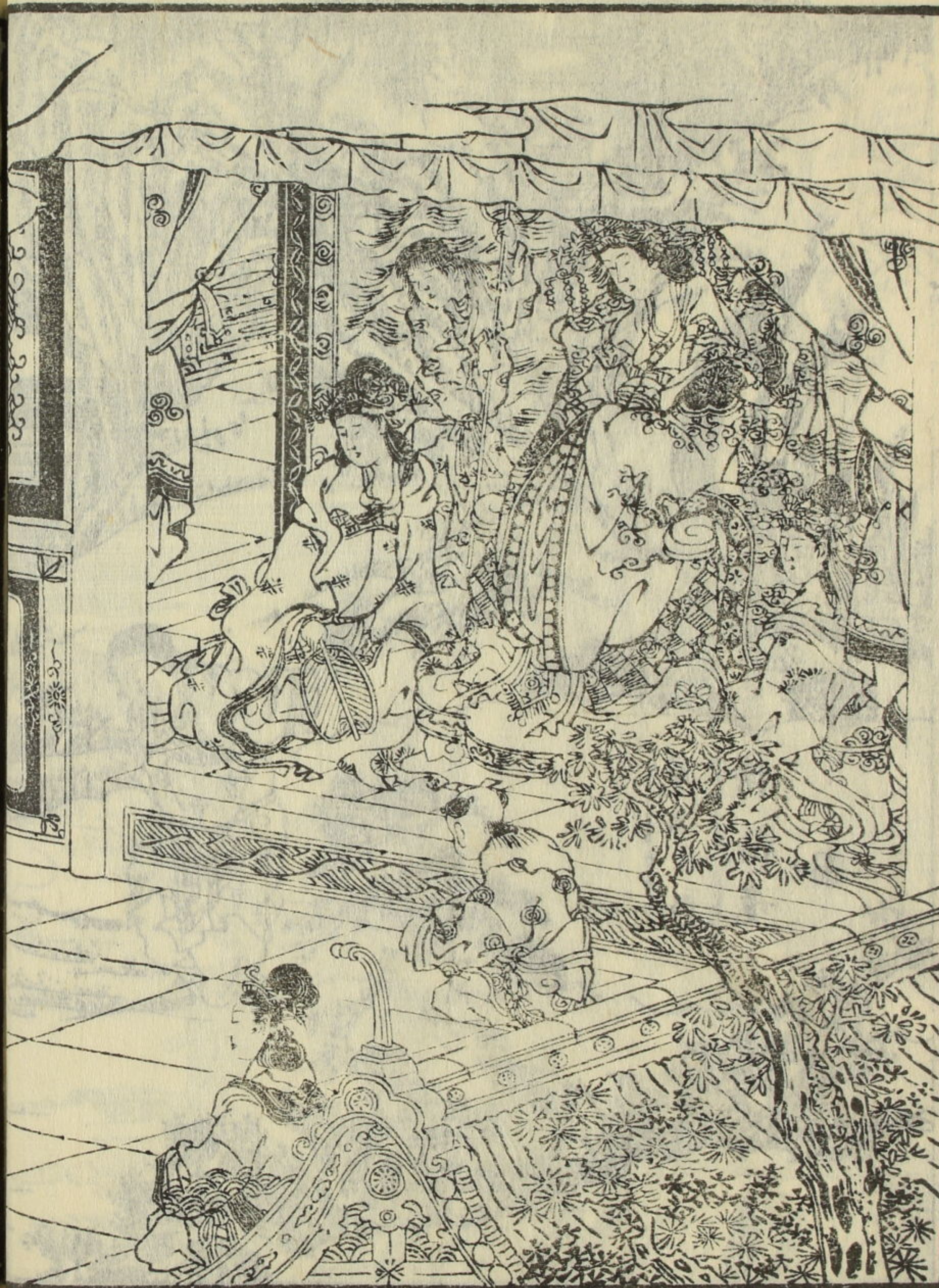
勇侶吉郎
誘仙境
圖



其

卷之二

四



卷之二

三

戸張いと尊に玄園の邊に道人とも可謂人多く居並ひ列位
 侶吉は礼を行ひ此を過さば奥の方より蘭麝の薫り
 吹送り、救多乃仙女ともさうさうる美女立出君待りも
 らづれに疾洩せぬと侶吉を奥深く伴ひ一の大坐を請
 孝子来りぬめと呼あも亦道人の如人立出何の福
 有く這より到りぬめと主人も大に飲躍無程拜面ありと云捨
 奥より入り童子等茶を運び且兼て用意ありと云て
 酒を各を双の器物の結講言計あり一侶吉も喜夢の心地まで
 稀有の姿小到り一と意を取締夫一挨拶述べさうは
 奥へあて美女立出主人密令拜謁做申さんとあれば

さうさう入らせぬと奥深く大坐を請一侶吉宴みて權
 待居るるゆ美香四下は薫り遙小音楽あり奥の方より
 評多の仙女乃とと人取田一個の美女身は綾羅錦繡を
 纏ひ頭は玉の簪を頂いと殊勝なる仙女のさうな僻静と
 歩出大坐の中英は空一侶吉を看て恭しく礼を
 做む不想起侶吉も自後と後頭一礼畢く后那美女侶吉は
 らづさう早此所ありさう御身を待たえ今日福ひは相
 見さうとと得て平心忽雲霧を拂ふか如くとありさうは
 侶吉のさうさう某不女の小人何の能ありさうさう一毀
 執衛のやと叫ひさうねが御身へ祖父又母の仇を報ひ

忠孝全く義勇氣備の義士あり故に予輩斯る
 有名の士相見喜躍の余り僥ひ此遠に到りしに
 同僚り童子をして送つ一先一酒を飲ば半点其志を
 述るのこころ美酒賢者をして食應善く一先一
 美女等も樂を奏せし舞註杯做させぬも其旨吉も
 意饒啻酔るごとく予不圖天人畏よのこねるると疑
 するも亦も此世の何國もて列位ハ奈何する人ハ侍人ヤ
 御身の上をも語り同くいと同一多水の主女つとく愛を
 相州之柄の山中もて由身今僅も未行ありしと想ひぬるんが
 原漁あり一まより八十有余里の道法を隔る仙境あり

予の頭は霜雪の白髪不生顔は年波の皺を不寄とつと
 平ら歳已は疾五百歳を保従ふ者衆皆二百歳乃
 星霜を經ひつと前小法身を運つる童子とつと
 百歳を送り越つと斯山中は老を養平月霞を
 吞霧が合且諸國を遊歴しつと世のさぬを知るか
 小御身の此に到りぬ人を運ふ終るは御身の恩
 人尾形寛行の義氣勇猛とつとと邪術を行ひ盜賊を
 業とつと許すの人ハ害あれは道小逆人乃罪天誅を脱れ
 予此程天文を窺ふ小近は小深倉石堂家なれぬ
 真身を終るは亡つとつと此世も生るる

せんと言ひ誘引侍りぬ茲は延替御身の忠孝天糸
 通し富貴其身を不離且齡ハ百歳を保つ今
 此蓄を与つ侍れ平日常是を以て頭を捨置ぬ
 時諸病の患を拂ふ事いと承り畢て那頭は
 頂くる玉簪を与人れば侶吉を以て取て押載厚謝す
 のちいつく寂早日もなけあんよ予不暇なりあんやと
 あり多れば主文笑て曰法身此に到りてを今日と想ひ入る
 疾三日を過しりと別て侶吉も驚き実中星霜其身小
 積るも不知仙境斯やありあん列位乃長壽を
 保てるとも理ありとく退坐の礼畢て立去んとする小

原の童子等門外より送り導出れ那所を顧る小樓門と
 看し處も雲霧覆ひ隠し不知其處斯て詭又
 歩行と覺て童子等いつく脚身の客舎此より
 程近々ともが找し暇やさんと別れを告立帰るを謝す
 見送る小岩百嶽々々山中平地は等しく恰も風の吹送る
 ぞく速く走る其行方を失ふ侶吉ハ惘然と果れ立去り
 一が衛一程の途をりて免立帰るとよる小貴客何処小
 到り人と呼ふも心を止る這を觀る前は温泉ふ
 浸り寓りくる客舎あり多き倍不審あり一動靜を
 説話那玉簪を出しとせむれば寓家の者皆之這り

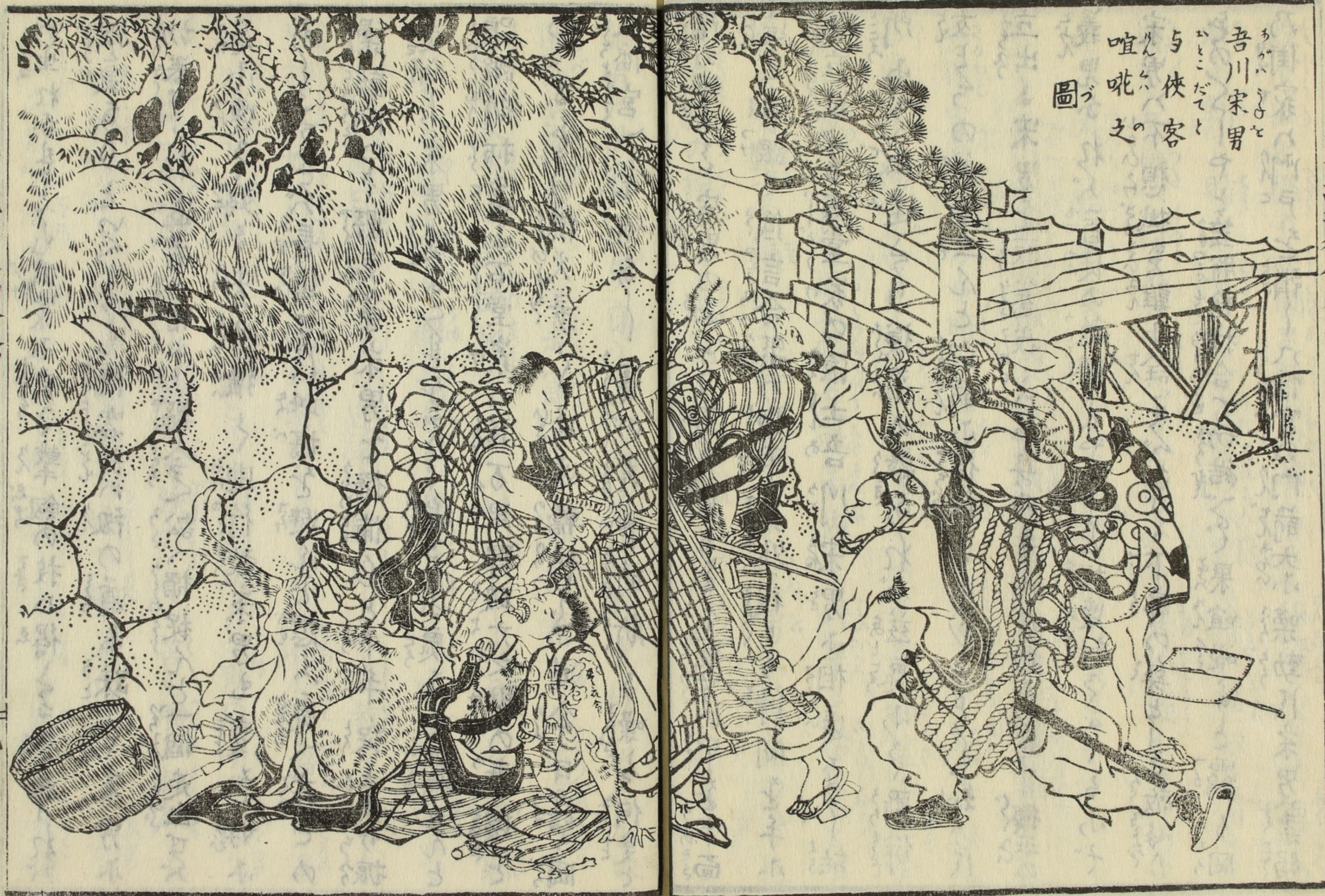
數十里を隔り當国足柄の山奥ゆき仙境あり悪人
此小到る時多災ひを免る人至る時の福しを得ると
宗くや傳へ侍人ぐ君入るまであの人々其仙境小とてあ
先し人と殆奇其の想ひをそ做しつりくると

吾川宋男逢難併石里野破之助妻環救宋男条

去程小吾川宋男も暗小篠倉小到り何卒一の巧をく
石堂家へ帰余世んと心掛武運狭りの幸免編笠小面を
躲し恐ろ霧り岡八幡宮へ社余做し拜畢く階を下んと
是る時過つる頃江の島小あゆみ宋男小討まつるは
俠客鶴の模平が義児寺四五個坊連此社内へ到り一

階の下あゆみ宋男の上より下り来るを不圖笠の中を半面
這を看跟て低言合衆ハ模平其外我は仲向を半小
掛立退る石堂家の浪士吾川宋男小相違る能
所ゆき出逢り模平の敵あれば茲處小く所併
友とちの義を立んと門前小待伏しあるともし知れ
立出る宋男を取巻我は法身の半小うけらるは模平の
義児かねる百徒の敵通しやととと援連討くる小ぞ
宋男ハ不想掛災難小詮とくあく下昂の身とく敵り
そのくやと笠脱捨抜合て切結を果喧嘩ふと鶴ら岡
乃街家の門戸を鎖し八幡宮の門前大小噪動其宋男ハ素弱

吾川宋男
と俠客
喧嘩之
圖



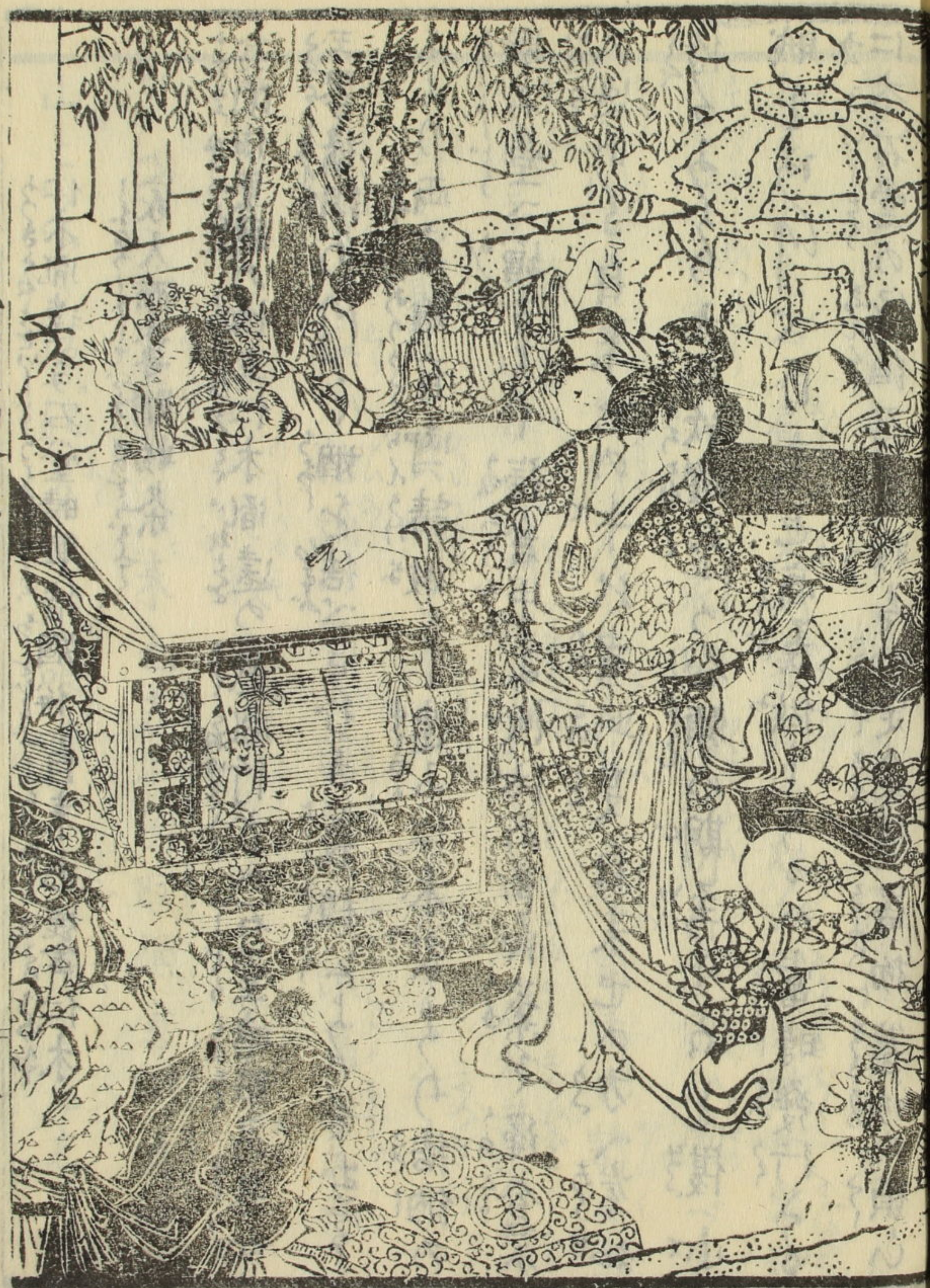
の生れをむとむし武家小育る撃劔の技ハ得るる更那れば
強氣ありとつとむし使客共ハ初の道小疎く宋男小
切巻られ這者口惜一縣令之訟一榻捉んと一個走出せ
是小連る残る者共續く進行故宋男も更を好小
あゝうまふ長追口此場を避んと想入處一疾この
噪動同く縣吏等宋男を搦捕んと十年捉索お振
走向ふ宋男遙より道をアく道る小處あく如何せん
跟蹤折柄這よ石堂家の臥石野破之助の妻環と
つくるもの供人多く延連轎釣るせ今日踏ら圖
八幡宮へ糸借る一賽の義表前斯る噪と何更と

流石ハ武家の奥床一ノ不噪動靜僥倖此人を憑
這物を遁れんと走寄る宋男狼藉者小出逢難美の
某武家方と見請頼生のうに權一の予を冊懸
むらむと云つ環と顔見合く仰天做一這者環度小て
侍入る面目ふ一と刀逆手取直一自教とるるを
環押止妹訂を延連立退のくあはれ刺人を過一曲者
自害とハ更可咲や女小こをあれ破之助の妻の環生
捉く樹へ曳んと女小稀ある強力あく苦し腰刀抛放一
其俣約るせ一轎へ宋男をお込下部小のえく大切の
囚人あねハ公を跟らとある處へ追く走來る縣吏等脊後

少ハ模平の義児共環の前後を押し取巻密令省交付
二人を過し曲者を躲焼中へと覺しつゝの速小早
小渡さねんや若抵頼むつて手は做しつゝも接んと
詰掛ねん環半点不噪這者根藉ある方く我妻ハ石堂
暗証の臣万里野破之助といつゝるの妻小侍がいつゝも
密令妻投し轎へ乗込し當藩中吾川采男とそそ入を
者少く土る頃衛を出奔其上人を害せしとの妻ふれ
ハ搦捕家風小行んと乃夫破た之助主人より此役義を
蒙り當時草を分けく在處を捜し求める采男ふれん
侍ハ女那くつゝも妻めし捕衛へ延連侍人より此上

あも根藉あつゝ縣吏連用捨つゝ妻御対まあり
とくんとと理の商控つゝる一言ハ縣職事ハ因て做し
斯る妻とハ不存ゆへ先刻よりの無礼の罪を饒し
玉せりし去りある上の石堂及乃家風小仕さるべし
と衆皆手持あつゝ立帰れん環ハ轎の中ふ望しつゝ
つゝつゝ此難を避んぐつゝ先刻出る女ハ淺智去
那くつゝ妻の想ハ子細も憐れハ暗小衛え伴ひ
ちつゝ心短氣を吐しつゝあふふと申合く轎寄
急衛をさしつゝぞ立帰りぬ





自來世説後編卷之四

十一



環救宋男
吏職義論
之圖

自來世説後編卷之四

十一

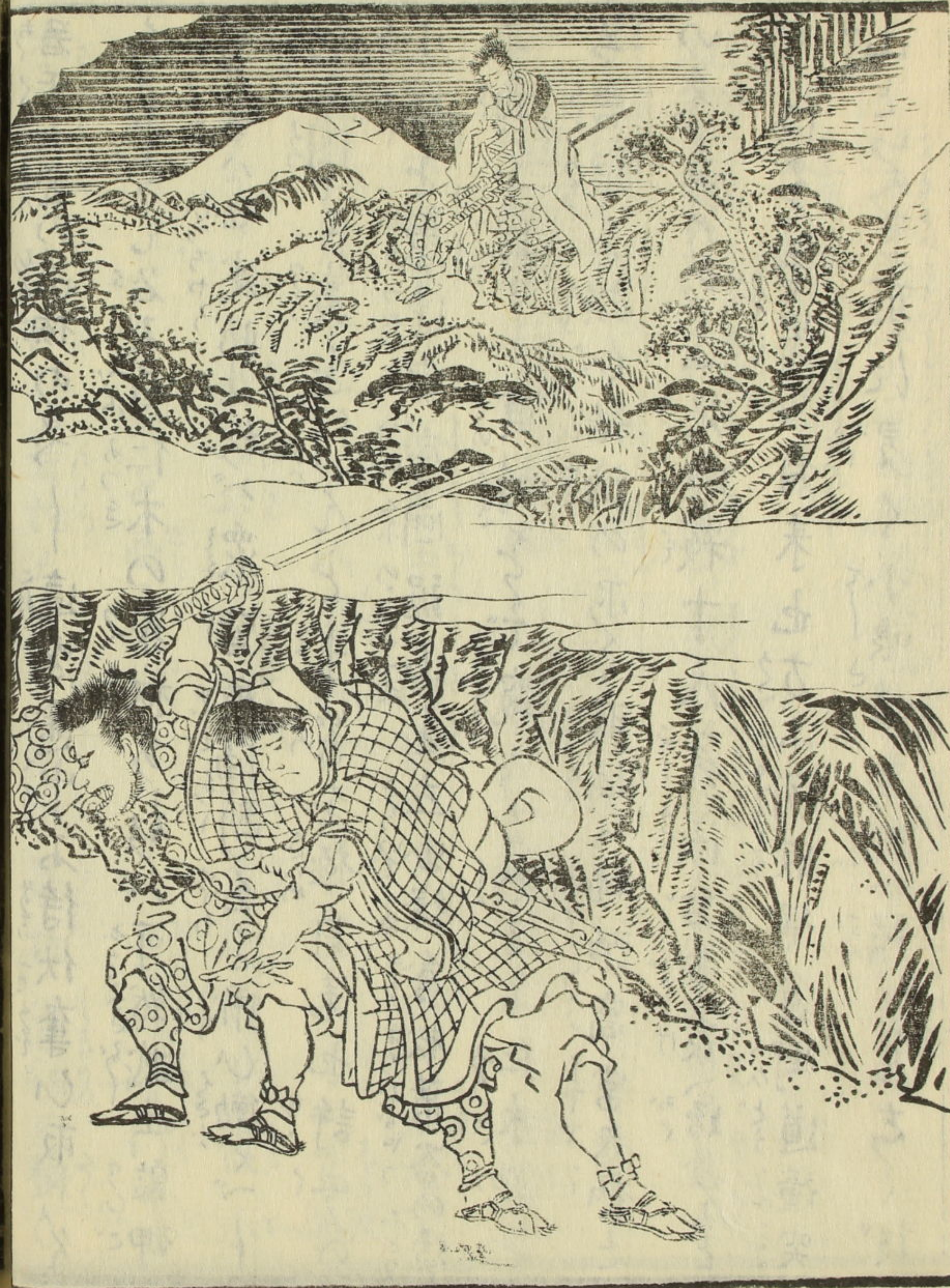
仁木亂遠と石堂暗服結婚 併 自來也 慶金 仁木

家人而奪贈物条

其頃伊豆國の城主仁木亂遠の息胤行方へ石堂暗服乃息女
玉琴縁組ありて姻を結べりて手義植公より命出さる
ふより兩家難有御請做し速に仁木家より結納の
験石堂へ贈るるに鎌倉中又汝汰ありて兼て鎌倉小
入込あり自來也の手比者此更自來也の方へ告知
侍るふより大小欣躍早に公願の期至りぬと僕小
賊を河川へ自來也商義做しけるに當時發行する
仁木石堂の縁組乃音物を必定金銀器物巻物の類に

若干大金の品物あるべし這を途中に待伏奪ひ取らん
あまどしと名を負仁木の家柄ありぬが可然武士監押
可當ハ必定非ぬれば衆皆無油断公を用ひ働くべし
功小因り賞を行んと手筈を極自來也許すの
小戒を惹連安房國裾山を立出鎌倉松葉谷の邊
小身を躲し其時をぞ窺くる然るに仁木家
と吉辰を撰び結納の取揃物頭高宮矢柄と
のそるりのふ足輕殺十人若添石堂家へ婿さんと
せはあを老早も自來也が小岡取鎌倉街道撞突
山とつくる取に多く小浪嘯を従へ待ともたつるに

ト
自來也
奇術塵
仁木家隸
之圖



仁木家隸
之圖

仁木の家人等此處も掛ねば盗賊ども前後より
 立頭を道を通り仁木屋より石堂へ因の飲
 悦申述べんと特く這まゝ出迎ひ侍りありと一
 義あも不及拔連と切て掛るもぞ仁木の家人等
 不想寄振藉ふ忙慌逃迷入を追跑押詰切立る
 物頭高宮矢柄這を着る推余ある山城どももの
 拳動りふ誠の武士の手並をえりりと體あつ取て
 馬乘廻く進掛る小城を十個討忽突伏或も
 手を負せ平不續と足腰を従へ勇を揮いあとも
 尋勢の盜賊を四方八埏小追崩して這勢い小小
 賊ども風ふ木の葉の散るごとく追巻るれく散乱
 せろを自來也撞突山ふあ川々此光景を觀る
 よりも天小向つて咒を結ひ呪文を唱へ腰鍛を
 拔る四下を拂へば這者不審哉陸地忽大河と
 あり洪水漲り仁木の家隸水小滄る根損を
 得るりと城等ハとつて返く此小押詰老那那
 小切伏さくも勇ある矢柄を始一個も不殘討取
 獲自來也の呪文あつて今迄溢れく大水も元の
 平地と干揚りく残る仁木の贈物と數十個の
 死骸の枕を双べありく結納の品く着干

奪ひ取死骸の衣類も逸く利取跡取行解させ
 自來也ハ小賊を轉る暗ふり〜予今日斯く
 計ひ〜散て結納の取物を目掛るの〜小作ら
 此取くを此候小女等ハ仮仁木の家隸と詐り
 假隸使者とあり〜石堂家ハ入込動靜を窺ひ
 来る〜予ハ跡より胡妻歌々助め候と別小
 一の計畧を行ひ汝等も大金を得るべ〜と
 謀を承〜小城等小立別を松葉谷へ延取ぬ

自來也説話後篇卷之四畢

